キラキラ輝く若いチカラ

「Shirakawa Week 2013」は、白河を離れた学生や社会人（若い世代）が夏休み期間を利用して、白河に住む子どもたちと学習支援を中心に交流するイベントで、昨年から開催されています。
若い世代が白河の“未来”を見据え、自発的に行っているこの取り組みの目的や内容を、遠藤健実行委員長にインタビューしました。

若い世代の取り組み「Shirakawa Week」の目的を聞かせてください。

目的は３つあります。まず、白河出身の大学生や社会人などが、夏の期間に帰省する機会をつくること。次に、大学生と白河の子どもたちとの交流を通じて、世代間の結びつきを強めること。そして、若い世代が行政や学校をはじめ地域の方とかかわり、地域を活性化させることです。

２回目の開催となった今年は、どのようなことに取り組みましたか。

今年は８月５日から18日までの約２週間で開催しました。期間中に行った取り組みを紹介します。

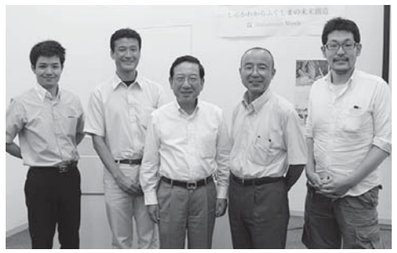
8月5日	障がい児を持つ親のサークル「星☆のたまご」の児童たちと、早稲田大学生15人が、体育館で遊具やボールを使って交流しました。
6日 7日	市内の小学生15人と大学生６人が、中心市街地をカメラで撮影しながら探索。それをもとに、オリジナルの地図を作成しました。
8日 9日	小・中学生、高校生の学習支援を行いました。
11日	白河出身の大学生・社会人が改めて市内を観光しました。市文化財課の方の案内で、白河の歴史を再認識しました。
16日	市内の高校生を交え座談会を行いました。白河の課題の発見と、その解決法などについて話し合いました。
18日	最終日にシンポジウムを開催しました。

①児童との交流（８月５日）
②地図の作成（７日）
③学習支援（８・９日）
④歴史を再認識（11日）

Interview

Shirakawa Week 2013
実行委員長

遠藤　健さん
Endo Takeshi
本市出身、白河高校卒
早稲田大学文学部４年



▲左から、遠藤実行委員長、吉川さん、鈴木市長、高橋さん、開沼さん

シンポジウムの内容を聞かせてください。

８月18日のシンポジウムは、イベントの総括として「白河の未来ー教育・人生・進路」をテーマに開催しました。鈴木市長を含め、４人のパネリストを迎え、様々な立場から、白河市、そして福島県の未来へとつながるお話を聞かせていただきました。
４人の方が話した内容を、抜粋して紹介します。

目指す方向性はノーベル賞とオリンピック

髙橋正人さん
Takahashi Masato
白河高校校長

- 白河高校の進路状況は、国立大学では福島大学以北が31％、私立大学でも関東志向が強い傾向にある。
- 白河から世界へ、そして白河に戻る人材の育成「iターン」の考え方。
- 世界を舞台にリーダーとして活躍する人（ノーベル賞）や、志を高く持ち、自らの課題に挑戦する人（オリンピック）を目指すこと。

故郷の文化・歴史を子どものころから学べる機会をつくる

鈴木和夫市長
Suzuki Kazuo
白河市長

- 海外の人は、自分の国、生まれ育った地域への愛着がとても強い。白河でも故郷の文化・歴史を学ぶ機会を、子どものころからつくっていきたい。
- この「Shirakawa Week」は、若い人たちが地域のことを考えている素晴らしい取り組み。若者たちの熱い気持ち、考えを行政の参考にしていきたい。

軽い気持ちで帰省できる機会をつくること

開沼　博さん
Kainuma Hiroshi
社会学者

- 地方は今、情報化が進んでいる。人気のドラマ「あまちゃん」でも、情報発信が弱い地域は取り残されると指摘している。
- 若い人が減っていく地域は、人を呼べるような仕組みを継続してつくっていく必要がある。また、「住む」でなくても「軽い気持ちで帰省する」ような機会を設けることも大切。

ミスマッチを減らす政策が必要

吉川　徹さん
Kikkawa Toru
大阪大学准教授

- 大学進学のために県外に出ていくことは、地域にとって損害になる。
- 高校生や大学生に、将来を見通した人生設計をしっかりとサポートする。
- 都市流出県民の実態を把握し、ミスマッチ（県内にいたいのに進学先がない、県内に戻りたいのに就職先がない、採用したいのに若者が戻ってこない）を減らす政策が必要。

今年のイベントを振り返っての感想、今後について聞かせてください。

「Shirakawa Week」は、今年度も無事に開催することができました。長く継続することが目標であったので、なんとか２歩目を踏み出せたという思いです。
今年は、改めて地域を元気にする源が人であることを再確認しました。例えば、県外に出て行った大学生が中心となって、イベントを担っていったので、個々のアイデアや経験はとても貴重なものでした。また、今年は昨年からのお付き合いから、地域の皆さんの支援を受けることが多くとても助かりました。そして何より、昨年参加してくれた子どもたちと会えるというのが大きな活力になりました。これらの出会いや縁を通じて、来年も継続して行いたいとの思いが一層強まりました。
今後は、来年度以降も継続した活動が行えるように、大学生を中心とした体制を築いていくことが目標です。また、より多くの子どもたちと交流できるように、市内の中心地だけでなく、多くの地区で活動したいと考えています。